

トランスジェンダーを生きる

—ある40代MtFのライフストーリー—

福岡 安則*・黒坂 愛衣**

ある40代MtF (male to female) トランスジェンダーのライフストーリー。このライフストーリーは、(1)「自分が何者かわからない」混乱と自己否定の時期、(2)「自分の存在をあらわす言葉」を獲得し周囲にカミングアウトする時期、(3)「トランス」をするなかで生じる周囲との確執とその乗り越え、の3つに分節化することができる。

語り手は“女性の服やからだを身につけたい”欲求を、幼いころからもっていた。同時に、自分以外の多くの人々はそうではないらしいこと、そうした欲求をもつ者が社会では「笑いもの」として意味づけされている事実、早くから気づいていた。必然的に、語り手は自分の欲求を周囲に隠す。ひとりのとき、こっそりと母親の服を着るなどして欲求を「解放」したが、罪悪感がともなった。成長するにつれ、周囲から要求される人間像と、自分がなりたい人間像とが異なることがはっきりし「混乱」する。自分の問題は人権問題ではないと思っていた。

結婚し子どもが生まれたあと、30代半ばのときに「トランスヴェスタイト」「トランスジェンダー」という言葉に出会う。「自分ひとりではない」ことを知る。親しい同僚やパートナーにカミングアウトする。

実際に「トランス」(服装の変化/改名/女性ホルモン投与)するなかでは、職場や家庭や地域社会の人々との確執と、その乗り越えがあった。今後の課題は、日本社会の「性別二元制」をゆるがすことと、当事者の居場所づくりだと語る。

キーワード: トランスジェンダー、カミングアウト、ライフストーリー

* ふくおか・やすのり、埼玉大学教養学部教授、社会学

** くるさか・あい、埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程2006年3月修了、日本学術振興会特別研究員(PD)、埼玉大学教養学部非常勤講師、社会学

Iさん¹⁾は、1962年に関西地方で生まれたMtF (male to female) だ(聞き取り時点で43歳)。29歳のときに結婚をし、2人の子ども(聞き取り時点で中学生の男の子と小学生の女の子)がいる。30代半ばのときに、「トランスジェンダー」という自分の存在をあらわす言葉に出会った。職業は高校教師。

Iさんは、すでに家庭や職場でカミングアウトをしている。さらに、複数の書物に体験を綴ったり、講演をしたり、テレビ番組の取材に応じたりなど、トランスジェンダーという立場をあきらかにしての社会活動を盛んにされている。

1 誰にも言えず「封印」していた

1.1 女性の服や肉体を身につけたい——小学生のころ

Iさんが「女性の服を着たい」という自分の欲求に気づきはじめたのは、「小学校の低学年のころ」だ。もうすこし年月を経て、小学校高学年のころになると、服だけでなく、女性の身体にも興味をもち始めた。それは「自分にとっての『対象』というよりは、『そういう肉体を自分のからだにつけたい』というふうな思い」であった。

《Iさん》スカートですね。スカートが大きかったですよね。まあ、それ以外にも、[女性用の]下着なんかもね、[身につけたいという気持ち]があったかもしれない。

で、やっぱり、女性の肉体、ひとつは胸であるとか、もちろん性器ですよ。そういうのを自分のからだにつけたいっていう、そういうのが、小学校の、たぶん高学年ぐらいから中学生ぐらいの時期に、あったと思うんです。

クリスチャンの両親のもと2人兄弟の長男として生まれ、「教会には、幼稚園の頃から通っていた」というIさん。家庭では「父親も母親も、ある意味で、性的なものにかんして表裏が」あり、Iさんは「性的なものにはいっさい触れることができないような状況で、ずっと育っていた」という。

Iさん自身も、小学生の時期には、性的なものにたいする「ある種の潔癖意識」が

¹⁾ Iさんからの聞き取りは、2005年3月28日、京都市内にておこなった。聞き手は福岡安則、黒坂愛衣。Iさんとお会いしたのは、このとき、黒坂が2回目、福岡は初対面であった。

あったため、クラスメイトの男の子たちが性的な話題をしているなかには「あんまり行かなかった」。だから、自分以外の同世代の男の子たちが、性的な関心をどんなふうにもつのか、「わからない」ままだったという。「女性の服を着たい」とか「[女性の] 肉体を自分のからだにつけたい」という欲求をもつ自分自身について、当時は、「すげべやなあ」と思っていた。

《Iさん》そんなこと考える自分って、その、女性の肉体にそんなちっちゃい頃から興味をもつというのは、すごい、すげべやなあと、自分のことを思うわけですね。

小学生当時のIさんにとって、そうした自分の関心や欲求は、すでに誰にも「言えない」ものになっていた。

《Iさん》親にも言えない。きょうだいにも言えないし、先生にも友だちにも言えないですから。……

自分としては、とにかくこれは絶対に言えないという、それがいちばん強かったです。封印をする、という。

自分の部屋を与えられていたIさんは、誰にもみつからないように気を配りながら「子ども部屋で、そういうふうな自分の思いというのを、ある程度、解放」していたという。

《Iさん》はじめのうちは、ほら、ベストを腰に巻いたりすると、スカートっぼくなるんですよ。やがて、首回りと腰回りでは、首回りのほうが細くなっちゃう時期がきて、それが入らなくなる。そうすると、まあ、スカートって簡単に作れますから。布一枚で巻けばいいし。あと、ちょうどコマネチが流行った時期で、あの、「白い妖精」と言われて、やっぱし、レオタードを着たいなんてこともありまして。で、自分で、やっぱりそれも作るんです。Tシャツをうまく改造すると、レオタードみたいな服、できるんですよ。

そういうことをやって、自分で、身の工夫をする。[家庭科が] 男女共修でしたから、[学校の学習用具として] 裁縫道具は身の回りどころがってますので。

自分の欲求を、周囲にはずっと隠していたので、きっと「まわりから見たら、普通」の子どもに見えていただろうと語る。

《Iさん》〔小学校のころは〕基本的に、いろんな、暴力関係はとても嫌いだったです。格闘技系を自分がやるのは、あまり好きじゃないですね。見るぶんには好きなんですけどね。

〔それでも〕けっこう活発は活発だったと思いますよ。男の子たちと、まあ、もちろん遊べるし。近所の女の子と「ままごと」もできるし。学校の男の友だちともよく遊んでたし。ドッジボールなんか、よくしましたし。自転車乗って、小山を走り回るとか、ジャンプするとか、そういうのは、さんざんやってましたから。たぶん、まわりから見たら、普通でしょうねえ。野球もしましたね。

勉強の成績は「中の中」くらい。小学生のころから「学校の教員になりたい」という将来の夢をずっともっていた。そしてもうひとつ、「根っここのとこに、どっかにあった」夢として、「女優になりたいという思いも、すごく強かった」という。

1.2 “女の子が好きなんやから、自分は普通やな”——中学生のころ

地元の公立中学校に進学すると、ブレザータイプの制服を着ることになった。「女の子の制服を見ると、うらやましいというか、あっちのほうがいいという感覚はあった」けれども、「しゃあないな」という思いでいた。

中学校時代のIさんは、「けっこう、いじめられっ子」だった。

《Iさん》えっとねえ、中学校ぐらいのテリトリー、教室のなかの構図っていうのは、まあ、言うてみりゃあ、発言権の強い男の子と、発言権の強い女の子、活発な子らどうしは、けっこう、一緒にわいわいと遊ぶという。あと、ちょっと不良グループもおって。で、わたしはどこにも属してない人間なんですよね。本が好きで、その頃は、SFとかミステリー、それから、いわゆる少女小説と言われてるモンゴメリとかね、あのへんの本をよく、もう、とにかくひたすら本を読んでるっていう。ほかにもSF好きとかいるんで、そういうな子らとよく遊んでたんですね。

ところが、まあ、比較的オタッキーな子らなので、不良グループから、たまにこう、いじめを受けたりっていうのもあって。で、ますます、そのオタッキ

一な連中どうして、3、4人で固まっていくようになる。

中学校時代、好きな女の子がいたけれど、ずっと「片思い」であった。Iさんは、子どものころから、恋愛対象および性的指向は「基本的に、女性のほうに向いていた²⁾。

²⁾ Iさんは、性自認と性的指向には「無限に組み合わせがある」と語っている。この聞き取り場面で、わたしたち聞き手は、「MtFか/FtMか」「同性愛か/異性愛か」という二項対立的発想にとらわれていたために、Iさんのこの説明をよく理解できず、さらなる説明をIさんに求めている。Iさんは、聞き手にたいし、自分自身のことを「トランスジェンダーであり、かつ、レズビアンである」というふうに“わかりやすく”説明してくれている。

Iさんが開設しているホームページには、Iさん固有のセクシュアリティのありようが綴られている。

「同性愛」「異性愛」という言葉について、わたしなりの違和感を書くことにします。いきなり書くなれば、「わたしにとっての『同性』って、いったい誰だろう」ということです。

わたしは、わたし自身の「性」がよくわかりません。ある意味では、わたし以外のすべての人は、わたしにとって「異性」です。ですから「同性愛」「異性愛」という言葉は、わたしにとっては意味をなしません。

やはり「同性愛」「異性愛」って、「性別二元論」からできてきている発想ではないでしょうか。自分自身の性にゆらぎがない人にとっては、何が同性で何が異性であるかということは、自明のことかもしれません。しかし、自分自身の性にゆらぎがあるトランスの人々、インターセックスの人々にとっては、「同性」「異性」という言葉を深く考えれば考えるほど、まず自分のことを決定しなくてはならないというその前の段階に後戻りをしてしまい、常に堂々巡りをするを余儀なくされてしまいます。

ちなみに、わたしが好きになる「性」はだれでしょう？

わたしはその時の気分で、「抱かれないな」と思う相手が変わります。時として「男性」、時として「女性」、時として「トランスの人」、相手の「性」はバラバラです。一貫しているのは「抱かれない」という気持ちがとても強いということです。そういう意味では、わたしはもしかしたら「バイセクシュアル」なのかもしれません。しかし、一般的に言われる「バイセクシュアル」とも少し違うような気がします。性自認にゆらぎのないバイセクシュアルと、性自認にゆらぎのあるバイセクシュアルの違いでしょうか。自分の足元が、常に定まらない。だから、相手が特定できない。そんな感じでしょうか。

でも、特定する必要もないか、と思う今日この頃です。ちなみに、わたしのつれあいには「浮気はダメ」とクギをさされているので、実際に「抱かれる」ことはおそらくないかと、少々残念に思っています。（『同性愛』『異性愛』という言葉 2000年6月7日）

《I さん》それがまた、すごく厄介なんですね。女性が好きなんで、“正常や”と、自分のことを思ってるわけですよ。自分のことってわからないので、ほかのひととの関係のなかで、自分をこう、考えると、“ああ、女の子好きなんやかから、べつに〔自分は〕普通やな”というふうには思ってるんですね。

中学生になると、クラスメイトの男子どうしの性的な話題にはいることもあった。

《I さん》ちょうど〔男性向け週刊誌の〕『プレイボーイ』とかが、あのころ、もう流行ってた時期で。みんな、やっぱり、女性の裸を見るんですけども、わたしは、裸の女性よりは、服を着てるひとが好きやったんです。服を着てる女性のほうがきれいに見えるし。で、自分もそういうふうになりたいという思いが強かったんじゃないかな。だから、〔自分が関心のあるページは〕みんなが見てるページとちがう。そういうのは、ありました。

自分のことを「正常や」と思ういっぱい、女性の服やからだを「身につけたい」という欲求は、中学生になっても、ずっとあった。I さんは、「笑われるの嫌」という気持ちから、そうした欲求があることを周囲に隠し続けた。

《I さん》たとえば、「女装癖」というようなことは、社会の笑いものになってるじゃないですか。いまでも、そういうの、あると思うんです。で、自分はそういうふうな人間だと思ったので。

いまでこそ、「変態や」と言われてもね、「まあ、そうやでえ」って言えるようになってきつつあるんですけども、あのころは、やっぱり、それを引き受けるだけの力がなかった。そうすると、「〔みんなと〕自分はちがう」というふうにと考えると、ますます、自分のことをしゃべれなくなるわけです、その部分ね。だから、ほんと、誰にも言わなかった。

自分の部屋で、ひとりだけで、女性用の服を着て時を過ごすことは、中学生の時期にも、ずっと続いていた。いまから振り返れば、もしかしたら、母親には感づかれていたかもしれない。

《I さん》所詮、自分の部屋って〔いっても〕子ども部屋ですから、母親が入っ

てきて、いろいろとやってる可能性、あるんですね。だから、わからないところに〔女性用の〕服を隠してるんですけども、見つけられてる可能性、やっぱり、ありますよね。

それから、まあ、ほんまものの女性の服というのは、〔家のなかでは〕母親のしかないんですよ。やっぱり、どうしても、母親が家を出たときに、そういうのに手を出したりするわけですよ。で、〔元へ戻したつもりでも〕たたみ方がちがう、みたいなね。そういうので感じてたんではないか、とは〔思います〕。——もうちょっと言えば、その、母親の服に手を出すっちゃうの、すごい罪悪感があった。

髪を伸ばすなど、“女性らしい”格好をふだんからしようとは、けっして思わなかった。（男子生徒のあいだで頭髪を短く刈るのが流行した一時期には、Iさんも角刈りにしたことがある。）中学生当時、Iさんが“女性らしい”格好をするのは、あくまで、ひとりでいるときだけだった。

《Iさん》いわゆる、その、女の子のシルシというものを、自分でこう、発現をしたいっていうよりは、完全に、外と中というふうに切り分けてました。自分ひとりのときは、ひとり。で、外ではまったく、その部分は欠落さして、っていうふうにした。

中学時代、不良グループからの「いじめ」で、Iさんが、いまでも印象深く覚えている場面がある。

《Iさん》母親の服っちゃうのは、当時の母親、40いくつやったと思うんですよ。そんなら、10いくつの子が着る服じゃない。やっぱ、ほんまものの女の子の服が着たいっていう思いがすごい強くて。

中学校1年生のとき、あれは忘れられないんですけども、その、いじめを受けたときに、クラスのなかの、すごい気の強い女の子のコートを着ろ、といういじめだったんですね。これ、うれしかったです。はじめて、ほんまものの女の子の服を着たわけで、で、「その子に向かって手を振れ」って。手を振りましたらね、ごっつう憤慨して、こう、服をはぎ取ってったっていう、ちょっと残念やったな、みたいな（笑）、そういうのがありました。

中学校 3 年間は「いろいろ、ちょっかいをかけられることもあるし、やむをえず喧嘩をすることもあった」I さん。「とにかく、暴力的な関係から逃げたい」という思いから、私立高校への進学を希望する。

1.3 華奢なからだと高い声——高校時代

中学卒業後は、キリスト教系私立大学の付属高校に進学する。I さんの父親が、この私立大学の教員をしているという縁もあった。男女共学の高校だった。

I さんは合唱クラブに入部。3 年間、テナー・パートを担当した。自分に「高い声がほしい」という気持ちはあったけれども、「比較的、声変わりが後のほう」だったことや、男声としては「声が高くて、細い」こともあり、「[自分の] 声にたいしては、不満感というのはなかった」と語る。

高校 2 年生のとき、I さんは、「公然とできる」かたちでの「女装」をはじめて体験する。

《I さん》[合唱クラブの] 合宿のときの、儀式がありましてね。男の子は全員、女装をするという、そういう儀式があるんですよ。そこ、先輩たちも一緒にくる。先輩に服を着せられて、で、化粧させられて。——うれしかったですね(笑)。それが、初女装です、人前の。公然とできる初女装。

その場にいた友だちからは「けっこうね、『似合う』って言われて、うれしかった」と語る。

《I さん》自分でそうしようとは思ってなかったんですけども、華奢な[かんじだった]、からだつきそのものが。だから、ほんと、筋骨隆々になった経験で、ないんですよ。そういった意味では、自分の肉体にたいする嫌悪感ちゅうのは、そのころ、あんまり持ってない。声も高いし。

高校でも好きな女の子はできたけれど、交際するまでにはならなかった。女性のを「身につけたい」欲求を「封印」し、それをときおり自分の部屋でこっそりと「解放」しながら、自分自身を「普通」「正常」と思っているという状況は、ずっと続いていた。高校時代、仲の良かった友だちや教師はいるが、自分のそうした状

況に気づいたひとは「いない」。

1.4 混乱——大学時代

高校卒業後は、Iさんが卒業した高校を付属にしている大学にそのまま進学した。理科が得意だったIさんは、大学進学にあたって「ほんとうは、宇宙〔科学〕をやりたいかった。一生、星見て暮らせたら」と考えていたという。しかし、理科の教師から『天文学でメシ食えん』って言われたこと、その大学に理学部がなかったことから、工学部を選択した。「おかげさんで、劣等生でした。数学できない、英語できない人間が、工学部へ行っちゃいけないですね。厳しかったです」。

大学時代には「社会運動との出会い」があった。とりわけ、Iさんが大学に入学した1980年前後は、反天皇制の運動が活発だった。『内なる天皇制』というのがひじょうに流行った時代で、「自分のなかにある天皇制をどういうふうに解体していく〔か〕みたいな論理のなかに、自分も入って〔いっ〕た」。

《Iさん》〔神学部の教授をしていた〕わたしの父親は、反天皇制のイデオログみたいなことをやってた人間なので、その父親に連れられて、反天皇制の講座の実行委員会とかに、もう、〔大学の〕1回生のときから入ってたんですよ。そういう連中のなかに、労働運動やってる連中もいて、そういうのに引きずり込まれて、しょっちゅうデモとか行ってたんです。

〔19〕80年に、1回生で、そんなことやる人間ちゅうのは、ほんの数えるほどしかないわけで。そうしますと、まあ、将来の運動を引き継ぐための人間だっただけで、英才教育をね、そのひとたちから、やっぱり、押しつけられようとする。それはそれで、ひじょうに名誉なことで、すごいかわいがってもらったのはいいんだけど、その、「本を読め」と言われるのが、しんどかったですね。『共産党宣言』読め、読めって〔言われても〕読めなかった。むつかしいのは苦手なんです。『ドイツ・イデオロギー』も読めないしね。——さっきも言ったように、本は好きなんですけども、SFとかミステリーとか、『赤毛のアン』とかでしょ。家へ帰ると、やっぱり、〔読んでいたのは〕『赤毛のアン』で。

社会運動の「英才教育」に身をおくなかで、Iさんに、ある「混乱」が生じてきた。

《Iさん》なんで少女小説を読んでたかといったら、ひとつはその、アンになりたいわけですが、自分は。“アンになりたい”っていう思いがある。絶対、ギルバートになりたいとは思わない。ギルバートというのは、アンと将来結婚する相手なんですけど。アンになりたい、ヒロインになりたいわけですね。いろんなストーリーのなかの女性になりたいっていう、そこに自分を投影していたんです、ずっと。

ところが、外へ、社会へ一歩出ると、「マルクス、読め」とか「レーニン、読め」とか言われるわけです。「トロツキー〔を読め〕」とかね、なんや、言われますよね。そこんとこで、その、自分のなかで混乱をじはじめた時期。だんだん、そういった意味では、はっきりするんです。“自分がなりたい人間”と、“[周囲から] 要求される人間”というのが〔異なるということが〕、かなりはっきりしてきた時期やったと思うんです、大学のころっていうのは。

また、友だちづきあいのなかでも、「混乱」が生じることがあった。

《Iさん》女性にたいして性的欲望をもつっていうことと、あと〔もうひとつ〕は、“女性と普通の友だちになりたい”っていう思いも〔自分のなかに〕あった。いろんな女性の友だちがほしい。普通の友だちとして。

ところが、たとえば、Aっていう男の子が、「あの子、好きや」って、みんなに宣言をする。なら、基本的には、この〔女の〕子にたいして、自分たちは手を出してはいけないという不文律があるんです、みんなのなかにね。——ところが、わたしは、友だちになりたい。べつに、付き合いたいと思うわけじゃない、友だちになりたいわけ。そういう不文律があるなかに、自分はその、“付き合いたいと思ってるわけじゃないから”っていうので、話をしたり、「遊びに行こかあ」みたいなのは、するんですよ。そうすると「あいつは、自分の好きな子に手を出しとる」って、〔男どうしの友だち関係を〕切られるんです。それでも、人間関係、かなりしくじっちゃうんですよ、大学時代。で、自分のこの感覚って何なのかって、ずいぶんと混乱を、そのへんで始めるんですね。大学のころって、そういう感じかなあ。

周囲の男友だちと自分とでは、女性にたいする性的な関心のもち方や内容そのものが「どうも、なんか、違う」らしいということにはっきり気づいたのも、大学時

代だった。男友だちと連れ立ってポルノ映画を見に行くことが何度かあり、会話をかわすなかで、やがてそのことに気づく。

《I さん》[わたしは] ポルノを見ても、だいたい女性のほうに自分を投影するんですね。だから、その、女性に投影して、自分が性的にそういうふうな、女性とこう、一致した、そういうふうな感覚を自分で感じるわけです。ところが、どうもまわりはそういう見方してないのかな、っていうふうに思うんです。まわりが、いわゆる男性がね、どういうふうなポルノの見方をしてるのか、いまだに知らないんですよ。もしかしたら、自分みたいなことを考えてるかもしれないし。でも、どうも、なんか、違うかもしれないという。——これ、なかなか、やっぱり、友だちに言えないので、いまだにわからないんですよ。

《I さん》あの時代、身体論とかが、けっこう [もてはやされていた]。「身体感覚はいったいどこまでか?」「爪は自分の肉体か?」「これ切ったらどうなるか?」みたいな話をよくやってたとき。自分の身体感覚のなかで、その、「自分のからだと離れた、胸のふくらみみたいなものを感じるときがある」って話をね、友だちに、ちょっとしたことがあるんです。「とくに、ポルノなんかを見たときには、そういうのを感じることがある」って言ったら、「それは、やっぱり変だぞ」って言われて。

たぶん、それが、はじめて自分が友だちになにか、自分の、そういうな性的な部分というのを話した経験じゃないかと思うんですけども。「それは変だぞ」と言われて、そこで一気に、やっぱり言えなくなる、ていうような経験。

大学時代にも好きになった女性がいた。そのひとに「憧れる」I さんの気持ちには、「[自分も] そのひとみたいな雰囲気になりたい」という思いも含まれていた。当時は「すごい華奢な子がいい」と思っていて、I さんのなかでは、「自分が [そういう女性を] 好きなのか、自分がそうなりたのかっていうの [は]、自分のなかで、いまいち切れてない」のだった。

《I さん》『果樹園のセレナーデ』っていう、モンゴメリの、ちっちゃな本があるんです。これは、果樹園の奥のほうに、こう、はかなげな、ちょっと病気がちな女の子がいて、バイオリン弾く、みたいな、そういうな話なんだけど。こ

の子に、ものすごい憧れるんですよ。

で、大学へ入って、太りはじめるんです、わたし。その後、まあ、いちばん太ってたとき、ウエストが 88 から 90 [センチ] くらいまでいく。体重も 80 キロくらいまで増えるんです。そのいちばん出発点が、大学の 1 回生なんですね。まあ、不摂生な生活と、不摂生な食事でしょ。ろくに運動をしないじゃないですか。どんどん太っていくんですね。そうすると、自分の肉体と、自分のイメージする肉体とのあいだにズレが出てきて、これがしんどいときではありました。

「金大中 (キム・デジュン) 助命運動」をとおして、在日の民族運動団体や大韓基督教教会のひとたちとの出会いもあり、I さんは「よく大韓教会の友だちとも遊んだりしてた」。また「教会の青年会」の活動では、部落問題の現地研修会に出かけることもあった。

ただ、この時点では、「男性であり、部落外の生まれ、とくに大学教授の子ども、そして日本人」である自分には、「自己否定以外なにもできない、『ごめんなさい』と言いつけるだけの運動になってしまう気がして」「その話、しんどいやと思って」、差別問題には距離を置き「深く知ることはなかった」という。

社会運動にかかわるなかで「大学に行くんだけど、授業に出ない」日々が続いた。I さんは、5 年かかって大学を卒業した。

2 「カミングアウト」までの道のり

2.1 自分を「男にしていた」時期——解放教育実践／パートナーとの結婚

教員採用試験に合格した I さんは、1985 年 4 月、公立高校の数学教師になる。

赴任校には、部落の子もいたし、在日の生徒も「[全校生徒のうち] 1 パーセントぐらい」いた。校区にある被差別部落は、「[戸数が] 千戸くらい」で、「9 千人の町民のなかの 3 千人が部落や、っていう、かなりでかい部落」だった。在日の集住地域はなかったものの、学校近辺にある「20 年前にできた新興住宅街」に、「在日のひとのなかで、ある程度成功したひとたち」が「単独で [=パラパラと]」住んでいたのだ。

大学時代の、とりわけ社会運動や教会の活動の先輩たちからは、部落や在日の生徒にかかわっていく取り組みをやれと、しきりに言われていた。しかし、I さんが赴

任した当時、この高校では解放教育を「いっさい、やってなかった」。

《I さん》なにかをせんといかんやろ。目の前に、〔部落や在日の生徒たちが〕じっさい、おるから。なんかせんといかん、というんで、もんもんと、じつは3年ぐらい、何をしたらええかわからん、と。先輩もなんもいないですからね。解放教育っていうことも知らないもんですから、何したらいいかわからない。

その後、「よその高校で解放教育をつくったひと」が、I さんの高校に赴任してきた。I さんは、この教員とふたりで、取り組みをはじめた。

《I さん》「部落問題をやるには、まず、地域で学習会をやろう」って言って、夜、学習会をやる。そんなら、校長がね、「いらんことするな」〔って言ってきた〕。「そんなもん、自分たちの勤務時間外にやるのに、なに、あかんねん」言うたら、「勤務時間外であっても、きみたちは公立高校の教員という立場なんだから」と言われて、「うるさいわあ」言うて、ケツまくって、そこで学習会なんかをして。で、子どもたちとの関係ができていく。地域との関係、親との関係ができる。

そんなことになったらね、とうぜん、部落のなかでお酒飲みますから、飲酒運転危ないなってことで、部落のなかに「家、貸して」っていう話、して。で、家を借りて、住んでた。15年間。

学校では「社会科学部」というクラブをつくり、在日の生徒たちを集めての活動も始める。I さんは、こうした活動をしていくなかで、生徒や教師たちから一目置かれる存在になる。

《I さん》教員と生徒がケンカしたら、わたし、仲裁役なんですよ。仲裁に入って、子どもと話をする。子どもらは、「どうも、おれらの話を聞いてくれよらんやな」と。教員は、「どうも、生徒に話をしてくれるらしいな」というかたちで、なくてはならない存在になりましてね。「不思議な力もつとるなあ」ってことで、自分の立場っていうのができてくるわけですね。

I さんは、教師になったばかりのころは「長あーい、ピタツとした髪の毛」で、「前

髪を内巻きに」していた。その姿は「女の子っぽい感じ」がしたから、Iさんは「ちょっとうれしかった」という。しかし、解放教育の取り組みをはじめてから、Iさんは、しだいに「自分を男に」していくようになる。

《Iさん》その子らに、こう、入っていこうと思うと、やっぱり、ジェンダーバイアス、すごい強いんですよ、その子ら。きつい子らはね。[わたしは]ますます、自分を男にしていくんです。写真、これ、講演なんかでよく使うネタなんですけど、いちばん男になった時期っちゅうのが、まあ、こんな顔やったです。[髭を生やして、パーマをあてて]強面(こわもて)の。そういう顔でね、生徒らと、バタバタしてました。——で、そういう自分と、それから、アパートに帰って、ひとりになった自分[とでは、まったく別ものだった]。

ちょうど、ニューハーフが流行った時期なんです。[テレビのチャンネルを]ガチャガチャやるとね、ニューハーフのおねえさん、並んではるんですよ。ああ、いいなあ。なりたいなあ、って思うんです。やっぱり、ニューハーフっていうのは、過去を捨てへんかったらでけへんちゅうことですし、やっぱり、それは自分にはでけへん。で、学校へ行ったら、その、やんちゃくれな子らと格闘してですね、わいわいやりあって、楽しく遊ぶわけですね。

また、この時期Iさんはランニングにも励み、大学時代から増え続けていた体重を「半年で20キロ」落としている。

《Iさん》すごい太ってた時期ちゅうのは、ほんとに、自分のイメージする憧れの肉体との差がはげしいんで、きつかったんやけども。そこで、すごく痩せたんで、自分の肉体のイメージっていうのが急激に上がるんです。ただ、外向けには髭生やさんといかん。でも、自分は、じつは女性の格好をしたい。そうすると髭っちゅうの邪魔。っていう、なんか、微妙な時期だったんです。

Iさんが、パートナーの女性と結婚したのは、1991年だ。その前々年、この女性が一年契約の事務職員としてIさんの高校で働き始め、ふたりは出会っている。

《Iさん》[当時、わたしらの活動に]関心を示してくれるひとつ、そんなにたくさんいなかった。ていうのは、こんな感じで、ものすごい攻撃的やったん

です。やっぱし、同和教育、解放教育っちゅうの、自分の学校でやっていくためには、ケンカももちろんせんといかんわけですわね。で、生徒たちとガンガンやって。——いっぼうで、女性にたいする蔑視みたいな、つまりその、「ろくになんもでけへんのに、おまえは文句言うな！」みたいなことを、平気で態度であらわす。口では言わなかったんですけど、たぶん、ものすごく見下してた。ごっつう、やっぱし、嫌がられてたんじゃないかと思うんです。

そのなかで、[わたしのパートナーになるひとは] ほとんど、数少ない、べつに嫌がらない人間だったんです。ぎゃくに、関心をもってくれてて。で、バレンタインの日に、チョコレートくれたのかな。“これは義理チョコか本命か”って、悩んだんですけど(笑)。その年の終わりごろからつきあいはじめて、次の年に結婚したかな。

2.2 “自分の問題は人権問題でもなんでもない”

結婚するにあたって、Iさんは「女装関係のもの」をすべて捨てた。それまでも、「生まれ変わる」決意をしたことは何度かあった。

《Iさん》たとえば、引越しをするじゃないですか。[大学時代の] 下宿から、実家へ戻ったときとか。そこから、[勤務校の近くの] アパートに行ったときとか。□□ [=住むようになった被差別部落] に行ったときとか。引越しをしますとね、基本的にはその、女装関係のものは、封印する。捨てたりするんですよ。“もう絶対、こんなことはしない”と。結婚なんつったら、やっぱり、[女装は] 絶対しちゃいけない、と。もう、捨てるわけです。——バレたら大変ちゅうだけじゃなくってね、“生まれ変わるんだ”っていうふうに思うんです。

[でも] やっぱり、ダメでしたよね。だって、うちのパートナー、自分とあまり体格が変わらない……、まあ、ちょっと、わたしのほうが背が高いし、からだが一回りおっきいんだけど、さほど変わらない。で、年齢はわたしの2つ下ですから、ほぼ変わらないですよ。そうすると、はじめて、そういうひとの服が、目の前に吊ってあるんです。いっぱい。これはね、ダメですね、やっぱり。もう、止まらないですね。女性の服を着たい、という。

パートナーが留守のとき、服を借り出し、ひとりで着ては、また元へ戻した。パートナーは「まったく疑わない」様子であった。

もうひとつ、夫婦生活をおくるなかで「すごい、むつかしい」問題だったのが、セックスだ。それは「いちばん自分の肉体と直面するとき」だ。Iさんのパートナーは「華奢なひと」で、Iさんにとっては「好き」な女性であると同時に、自分がこうなりたいたいという「憧れ」でもあった。

そういうことで、いろいろひとには言えない葛藤を抱えてきた。Iさんは、こうした自分の状況を、パートナーにも誰にも「ずっと言えなかった」と言う。

《Iさん》〔勤務校で解放教育をやっていくなかでは〕部落の子とか在日の子に、自分と出会うとか、そのつぎはやっぱり、カミングアウトですよ。部落民宣言とか、本名宣言とか。そういうなことをずっとやってくわけです。子どもたちにたいしては、「自分のことを絶対、友だちに言えよ」という話をするんですけども、自分では絶対言わない、自分のことを。誰にも言わなかったです、やっぱり。

Iさんは、この当時はまだ「トランスジェンダー」という言葉を知らず、「自分は何者か、わからない」状態であったと語る。

《Iさん》ただ、ニューハーフに憧れをもつていうのあったんですよ。なにかわからないけど、とにかく〔自分は〕そういう人間らしいけども、お水〔＝水商売〕の世界でしか生きられない。うん。自分はそうなりたいたいけども、なれない。基本的に「お水」になるかどうかは選択だって思っていましたので。自分は、その選択は取らない人間。だから、やっぱり、いまの現状でいくしかないや、って、自分で納得するわけです。

Iさんは、いまでも「忘れられない」こととして、当時の心境をよくあらわす場面について語っている。

《Iさん》ある在日の子が、高校1年生のときに、はじめて自分が在日って知りますよ。受験票を目にするわけです。そこに、本名が書いてある。はじめてそこで、自分が在日やと知って。その子と3年間、クラブ活動を一緒にやるんですけども。

ずっと、やっぱり〔わたしはその子に〕言うんです。「友だちに言え、友だち

に言え」って。〔しかし、その子は〕言わないですね。で、3年生の、卒業式の前日に、やっぱりもう一回「友だちに言えや」という話をしたら、やっぱり「言えへん」て言うんですよ。——そんなときの自分の気持ちは、なんで言えへんねん、て思うわけです。まあ、それなりの取り組みは、学校でやってきたし。なによりもね、在日の問題っちゅうのは、ちゃんとした人権問題。だから、その、人権を主張することは正義ですから、その正義を自分が行使することが、なぜ言えないんだ、っていう思いがある。裏返しにあるのは、自分の問題は人権問題でもなんでもない。とっても恥ずかしいことだ、と。このしんどさに比べたらマシやろうっていうふうな思いが、自分のなかにあったんですよね。「なんで言えへんねん」って、ここまで出かかりますけども、やっぱり、それ言うちゃいけないですからね。ですから、その部分は飲み込むっていうような〔ことが〕、ありました。

2.3 自分の存在をあらわす言葉を獲得——同僚のカミングアウトをきっかけに

学校現場では、「なんでも言〔い合〕える場所づくり」がIさんの「基本的なテーマ」だ。「社会科学研究部」の活動のほか、「在日外国人高校生交流会」の運営を手伝い生徒たちと参加したり、毎年「部落解放奨学生全国集会」に生徒を引率したりしていた。

高校の教職員どうしの場として、「教職員演劇」にも積極的にかかわっていた。そこでIさんは、ひとりの同僚から「ゲイである」というカミングアウトを受ける。そこから「トランスヴェスタイト」「トランスジェンダー」という、「自分の存在をあらわす言葉」に出会ってゆく。1996年は、Iさんにとって、まさに「一大転機」が訪れたときであった。

Iさんは、その年の「教職員演劇」の台本書きを担当していた。どんな内容にするか迷っていたとき、仲間うちから「ホモネタの話」が出てきた。『『こんな芝居つくったらおもしろいやんか』って。“でもオマエ、なんぼなんでも、同性愛者を笑いもんにするのはいかんやろ”っていうふうな思いもあったんだけども……。ほかの「ネタ」がなかなか思い浮かばないまま時間が過ぎ、悩みに悩んだすえに、けっきょく「ホモネタ」に決める。

《Iさん》“もう、それでいくか”って決めたんが、7月とか8月くらいなんです。

9月本番で、まだ台本のダの字もできてない。そもそも、同性愛って、いったい

どういふものかって、ぜんぜんわからない。誰に聞いたらいいかなあっていったときに、たまたま……。

職員会議のとき、[ある同僚から]「こんど、どんな芝居にすんのお？」って言われて。このひと、スポットやってくれるんです、いつでも。めちやめちやスポットがうまいんです。[それで]「男が女を好きになって、女が〔べつ〕男を好きになって、この男がこっちの男を好きになる三角関係の芝居をつくろうと思ってる」って、プロットだけ言うたんです。

そうしたら、こいつは、“とうとう来るべきときが来たな”と〔このとき思ったというふうに、あとから聞いた〕。彼は、ゲイなんですけどね〔それを、当時は周囲にずっと隠していた〕。“どうしようか”って悩むんです。つまり、カミングアウトして、一緒に芝居をつくっていくか。いつものとおり、カミングアウトせずに、そのままさらっといくか。

彼はカミングアウトしてくれたんです。——「同性愛について、なんか知らないか？」って〔彼に〕言うたら、「知ってる」って。で、自分のことを書いた手記みたいなものを、わたしに渡してくれた。……

〔わたしは彼がゲイであることを、それまで〕まったく知らない。10年間同僚やっても、知らなかったですね。そんなに深いつきあいじゃなかったですから。

Iさんは、同性愛について理解を深めるため、セクシュアリティ関連の本を読み始める。そして、そのなかにトランスジェンダーにかんする記述を見つける。

《Iさん》〔ある本を読んでいて〕「ゲイ」っていうのは、自分のことを男と想着て、男が好きなひとなんだ、と。で、自分のことを男と思わず女と着てるようなひとたちのことを「トランスジェンダー」っていうんだ、という言葉が、はじめて出てきたんです。そのなかに、「トランスヴェスタイト」っていうのがある。これは、異性装をしたいひと。——このときに、はじめて、自分はトランスヴェスタイトなんや、っていうふうに気がつくんです。やっど、自分の存在をあらわす言葉と、ようやく出会えたのは、そのときなんですね。当時は、自分のことはトランスヴェスタイトっていうふうに、ずっと着ていて。

「自分の存在をあらわす言葉」と出会えた心情を、Iさんはつぎのように語って

る。

《Iさん》まずひとつ、自分はひとりぼっちではない。どうも、たくさん人がいるらしい。それも、その、まあ、女装スポットみたいなどこでやってる人もいるけども、笑いものになるだけじゃなくて、そういう人たちのコミュニティもあるらしい、と。あのころ、ちょうどインターネットが普及しはじめたところですので、そういう人たちがサイトをつくってるらしい【と】。で、あちこち見に行ったら、たくさんあるんです。うわあ、こんなにたくさんあるんだっていうふうに思ったら、もう……。

このころは、夜、学校のコンピュータ教室で、インターネットサイトをみてまわる日々が続いた。さらに、カミングアウトをしてくれた同僚に連れられ、さまざまなセクシュアル・マイノリティの人たちと出会う機会も得てゆく。「ものすごく面白かったんです。あたらしく、いっぱい知識として獲得をし、そういう人たちと出会う、という【のが】」。

この同僚が、職場で「ゲイである」ことをカミングアウトしたのは、はじめはIさんにたいしてだけだった。しかし「教職員演劇」で同性愛をテーマにした芝居づくりをすすめるなかで、状況は少しずつ変わっていった。

《Iさん》「Aさん」という仮名で、わたしが言うわけです。「Aさんから聞いた話なんやけども、同性愛ちゅうのは、こういうもんなんや」っていうかたちで言いながら、一緒に、みんなと芝居をつくっていくんですよね。ところが、それを横で聞いているわけですよ、彼は。自分のことを「Aさん」言うてるわけです。で、一生懸命、みんながそこで考えはじめてる姿を見たときに、彼は、やっぱり黙ったままでいられなくなって。それから、うちの学校のなかで、じょじょにカミングアウトを重ねていくんです。

わたし、けっこう学級通信とかをマメに出すタイプなんで、その教員版で『風のたより』っていうのを出して、教職員にたいして、いろんなこう、問いかけをしていくんです。で、カミングアウトを受けた人たちからも、いろんな投稿をしてもらいながら。そういうなかで、彼が、じょじょにカミングアウトの輪を、うちの学校で広げていくんです。で、もう、どんどん楽になっていくのが、横についてわかる。

この同僚とは対照的に、Iさんは、自分のことを周囲に隠している「しんどさ」を、だんだんとつものらせはじめたという。

《Iさん》自分は自分で、自分のことに気がついたけども、でもやっぱり、こういうふうな〔髭を生やした、強面の〕顔のままなんです。そうすると、こう、自分は個人としては解放されてるし、自分のなかの罪悪感って、すごくなくなってくんだけども、でも、クローゼットのままなんです。それが、むちゃくちゃしんどくなるんです。

2.4 「爆発的なカミングアウト」の時期

Iさんがはじめてカミングアウトをしたのは、やはり、Iさんをセクシュアル・マイノリティの世界に出会わせてくれた、ゲイの同僚にたいしてだった。けれども、Iさん自身のカミングアウトが「爆発的」なものであったこともあり、この同僚との関係は、一時期「切れて」しまったという。

《Iさん》彼は、すごく自分の、やっぱりいちばんしんどい部分で；わたしとつながりたいと思ってくれてたんで、そこの話をしようとするんだけども。わたしは、しんどくなってくるんです、それが。受け止めきれなくなってしまって、答えをはぐらかし始めるんです。話をずらし始めるんです。で、そこに、さらに自分の話を乗っけちゃったものだから、彼としては、自分がいちばんしたい話とぜんぜん別のところにいって、かつ、そういうシチュエーションを利用して、わたしが自分の話をするもんだから、うん、やっぱり、“利用してる”っていうふうに、彼は感じ始めるんですね。

そのほか、セクシュアル・マイノリティの集まりでの友人にも、カミングアウトをした。しかし、やはりそれが「爆発的」なものであったために、Iさんは、この時期、人間関係を「しくじって」しまったという。

《Iさん》なんの準備もないままで、「自分はこれなんやあ、わかってくれえ」みたいなとか、「自分はしんどいねん」とか言うたりするんですよ。そんなん、もう、ぜんぜん「何したいの、あんたは？」みたいな感じで言われる。で、「聞

きたくない」と言われる。

あるいは、わたしが部落とか在日の子とか、そのゲイの同僚とかとかかわるなかで、「あいつ、影響受けてるんちゃうかあ」みたいなことまで言われる。そんななかで、中途半端なカミングアウトをした状況で、こう、しばらく時を過ごす。

パートナーにカミングアウトをしたのは「97, 8年」のころだ。Iさんにとって「パートナーの壁は、すごい高い」ものだったが、あるひとの言葉に背中を押されるかたちで、言う決意をする。

《Iさん》セクシュアリティ関係の〔集まりの〕打ち上げかなんかで、飲んでるときに、自分が「トランスヴェスタイトだ」という話をしたら、あるひとに「あなたは、それを実践してるのか？」って言われたのね。

わたしはその、自己否定感みたいのなくなったんだけど。隠れて、ひとりで、たとえば車の中で女性の服を着る、ということにたいする罪悪感はなくなったんだけど。人前にそれを着て出るなんてことは、いっさい、してなかったんです。

自己否定感や罪悪感がなくなったあとも、Iさんは、髭を生やしたままでいた。それは、「自分が変化するということにたいして、〔気持ちの〕どっかで止めて」いたIさんの心情のあらわれだった。「そうしないと、わかりますからね、まわりに。『なんで、髭、剃った？』みたいな話が出てくる」。

《Iさん》〔「実践してるのか？」とわたしに問いかけた〕この方は、ゲイであることをカミングアウトして、HIVの活動をしてるんです。ガーンときましてね。ああ、そうかあ、って。やっぱり、これを自分が誰かと共有するまで考えなきゃならん。とりあえず、やっぱり、言わないといけない。隠したままではいけないと思って、パートナーに、その日の夜に、ワインで酔った勢いもあるんですけども、カミングアウトしたんです。かなり爆発的ではあったんですけども。

……

〔パートナーは〕もう、めちゃめちゃ驚いてました。あの、慌てふためきながらも、おそらく、受け止めなければならない、というふうに感じたんでしょ

うね。そういうに思ったと思いますよ。ですから、ひじょうに、慌てふためきながらも、「そうやったんや。なんで、早くに言ってくれなかったの」みたいなね、そういうな感じですよ。それから、「こんな服やったら、似合うんとちがうん？」とか言うて、自分の服を何着かもってきてくれて、「こんなん、穿いてみたら？」みたいな感じだね、その晩は、とりあえずは、まるくおさまるんですね。

それからなんですよ、大変なのは。じっさいには、そんなもんね、受け入れられるわけではないんですね。

3 トランスして日常を生きる——周囲との確執と乗り越え

3.1 抑えていた欲求の噴出／パートナーとの衝突

パートナーにカミングアウトをしてから、Iさんは髭を剃り、髪も伸ばしはじめた。服装もフェミニンな雰囲気になるといふかたちで、少しずつ、職場や家庭での日々を過ごす姿が変化していく。

《Iさん》わたしは、[パートナーに]受け入れてもらえたと思って、やっぱり、そこから攻勢に出るんですよ。「自分はこうなんで、ああしたい、こうしたい」ってね。

はじめは「それなりに受け入れて」くれていたパートナーも、やがて「やめてくれ」と反対をするようになる。

《Iさん》「家の中でスカート穿くな」とか、いろいろ出てきますよね。子どもがいますから。

[わたしは、19] 97年ぐらいに自分のことに気がついて。これは、下の子が生まれた年で、上の子はたぶん、小学校に入学したころなんです。上の子にかんして[は]、ものがわかってくる時期。やっぱり、パートナーは、それにたいして「やめてくれ」って。「子どもが精神的に不安定になるから、やめてくれ」とかね。ずいぶんと、子どものことで言われました。

ただ、だんだんだんだん、自分が自分に気がついていくっていうか、自分のなかでもってたいろんな枷(かせ)っていうものはずしていくと、どんどん自

分のなかで、こう、思っているのが噴出してくるんですね。

《Iさん》女性ホルモンを飲んだら胸がふくらむっていうのは、知ってたんです。マンガであったんで。で、やっぱり“胸がほしい”っていうの、ずうっともってたんで、「女性ホルモンを飲みたい」って言い始めるんです。

「トランスヴェスタイトや」って言ってたけども、たぶんトランスジェンダー、あるいはトランスセクシュアルなんだろうというふうに、自分では、そのころに気がつきはじめるんです。でも、[パートナーは]「それは、やめてほしい」。「肉体をいじることはやめてほしい」ということですよ。これを、次のステップで、言われるわけです。

いっぽうで、どんどんどんどん女性化は進行していく。たとえば、メイクをしたくなる。「それをできれば家の中でもしたい」。「ダメ」っていうことで、ずいぶんと、この時期はケンカをしたんですね。

Iさんが「実践」をしていくなかでは、さまざまな試行錯誤があった。

《Iさん》わたしたち[トランスジェンダー]の世界では、[自分がありたいと思うジェンダーにまわりからみられることを]「パス」って言うんですけども。パスをするとき、髭が、いちばん大きな[障碍]要因になるんです。髭の剃り跡があると、あれは男性やな、ってすぐにわかっちゃう。わかられてしまうんですよ。

[では]どうするかっていいますとね。髭を剃るでしょ。それを、すっごい深剃りをして、青みが出ないようにするんです。その上に、スポットファンデーション[を塗って]、隠して。色は変わるんで、その上から、こんど、メイク。そんだけ塗ると、もう、顔が真っ白になるんです。そこに、だから、しゃあない、チークを入れたり、シャドウを入れたりして、顔をつくっていく。ものすごく濃い化粧になる。……

深剃りをする、肌、荒れるじゃないですか。荒れた上から、まだ剃るんですよ。もう血だらけですよ。もう、すっごい、きつい化粧になって。困ったなあと。

だんだんと「女性化」していくIさんにたいし、パートナーは「何年かケンカをす

るなかで、少し受け入れて、少し受け入れて、っていう感じ」であった。

Iさんが、パートナーを「すごい偉いなあ、すごい人や」と思うのは、このように衝突を繰り返すなかでも、Iさんを「女装コミュニティと出会わしてくれた」からだ。

3.2 パートナーは後押しをしてくれた——仲間との出会い／脱毛／子どもへの説明

京都で月1回のイベントをおこなっている女装コミュニティ「玖伊屋（くいや）」の存在は、1999年ごろ、新聞の取材記事を読んで知った。「こんなコミュニティあるんやなあ」と思ったが、しばらくは「どうしようかなあ、行きたいけども、なんか怖いな、みたいな感じで、悩んでた」時期が続いた。

Iさんの知り合いの高校生が、偶然にも、卒業後に「玖伊屋」でスタッフをしていることを知ったのも、このころだった。

《Iさん》〔在日外国人高校生交流会で知り合ったひとりの在日生徒に、あるとき〕「レズビアンの話、[いまから]聞きに行くんや」ちゅったら、その子が“こいつ、こんなことにも興味をもってるんや”って思って、「自分はレズビアンや」って、わたしにカミングアウトしてくれた。「ようやく、先生、わたしの残り半分を知ったんやね」って言うてくれて。そこから、その子とセクシュアリティの話ができるようになって。いや、男の子っぽい子で、のちに自分はトランスジェンダーなんだって言い始めるんです、その子は。

この子がじつは、〔高校卒業後に〕「玖伊屋」でバーテンをやってるつつうんですよ。「先生も、トランスジェンダーなんだったら、来たらしいよ」って、誘い受けて。「そこの主宰やってるひと、おもしろいよ。先生と似てる」とか言っで。〔わたしは〕ずいぶん悩んで。どうしよう、どうしよう、どうしよう、って。〔「玖伊屋」のことが〕新聞にも出て、うわあ、どうしよう、と思ってたら、パートナーが「行っておいでよ」って、背中を押してくれたんですね。

「玖伊屋」のイベントにはじめて参加したときは「なんちゅう場所や、これは、と思うた」³⁾。ほどなくして主宰者と仲良くなり、Iさんはスタッフのひとりになっ

³⁾ 「玖伊屋」が具体的にどんな場所であるのか、この聞き取り場面では、語られていない／質問されていない。聞き取り開始から2時間以上が経過し、後半は、語りのペースが速くなっている（Iさんも聞き手も、疲れてきたのか、お腹が空きはじめてたのか……）。Iさんのホームページから、Iさんが「玖伊屋」について記述して

て「仲間と出会いはじめる」。「仲間」のなかにも、「[女性]ホルモン[投与]をしている人」「[性別適合]手術やってる人」など、いろいろな人がいて、「髭は、剃るより抜いたほうがいい」というような、具体的なノウハウを教わりもした。

《Iさん》夜になったら、髭がちょっちょっとうるじゃないですか。皮膚に、こうなってるやつをね、毛抜きで搦り取って。スポッと抜けるんです。たまに失敗して、実もくっついてくる。それを、タオルで冷やししながら、やるんです。

はじめは[パートナーには]「やったらええやん。毛なんか、抜いたらええやん」と言われてんですけども、それは1時間ぐらいかかるんですよ、適当に抜けるまで。それを見てるとね、ごつつう、いたたまれない。痛々しいんで、うちのパートナーは「脱毛してこい」って言うてくれたんです。おカネも時間もかかりますから、わたしも、どうしようかなあと思ってたけど、「行ってこい」と言われて、それで脱毛したんですね。それが2001年か2年ぐらいやった。――そんな感じで、[パートナーは]少しずつ、自分がある段階まで受け入れられるようになったら、わたしのこと、後押しをしてくれるんですね。

「髭を抜く」行為や、「脱毛」後のIさんの姿は、とうぜん、子どもたちの目にも映ることになる。

いる部分を以下に抜粋する。

「玖伊屋」は、京都で月1回、京都市内の某所で行われているカフェです。主宰はMさんです。そのほか、数名のスタッフがいます。ちなみに、わたしも、「酒保担当」ということで、スタッフに混ぜてもらっています。

「玖伊屋」のおもしろいところは、参加者を必ずしもトランスジェンダーのみに限ってはいないところです。ですから、ほとんど全国から、「トランスジェンダー各種」「レズビアン」「バイセクシュアル」「女装者好きの人」「ジェンダーに疑問を感じている人」「とても方向音痴な人」「本人はフツーと思っている人」など、さまざまな人が来られます。ですから、必ず「女装」をしなくてはならないわけではありません。わたしも、面倒くさいときや力仕事をするときには、そのままの格好で「労働」をしています。もちろん着替える場所はあるのはあるのですが、カーテンをつつてあるだけという、とってもラフなスタイルです。一時は、カフェ形式で行っていましたが、最近では「持ち寄りパーティー形式」になりました。といっても、必ず何かを持ってこなくてはならないわけではなく、別に何も持ってこなくても参加はOKです。結局、「玖伊屋」にはMさんの「意思」が働いてはいるものの、特にその拘束力はなく、参加者みんなで作るカフェ・パーティーということなんです。

《Iさん》わたしが、毛抜きをしてる姿っていうのを、うちの上の子は見てるわけです、小学生でね。「とうちゃん、何してんの?」「毛抜いてんねん」とかいう話をして。で、脱毛、行きはじめた。

弱ったのは、下の子なんです。生まれたときから、[わたしは]トランスをはじめて。脱毛にいたるなかで、ひとつだけ、最後の最後まで悩んだのは、“この子には、父親としてのジョリジョリ [=髭面での頬ずり] をしてあげられない。すべすべの頬しか、この子は知らないことになるんだ” と思ったときに、それでほんとにいいんだろうか、と思ったんですけども。

脱毛をしたあとは「一気に楽になった」とIさんはいう。髭の剃り跡がまったくなくなることで、素颜でも「パス」できるようになり、「それからこっち、メイクをしたと思うなくなっちゃった」。このころには「外[見]だけでも胸はほしいので、日常的にスポーツブラ [を着けて]、パットを入れはじめた」。

Iさんが「トランス」していく姿を、子どもたちも見ている。とはいえ、あらたまった説明は、Iさんの口からは「なかなか言えない」のだった。子どもたちへの説明は、パートナーがしてくれていたようだという。

《Iさん》[パートナーは]子どもに、「きみのお父さんは……」っていう話をしてくれてたみたいなんです。小学生のあいだ、ずうっとかけて。ですから、上の子にかんしてはね、じつは、かなり自然に受け止めてくれてるんです。……

あるとき一緒にテレビ、寝転がって見てたんです。「学校へ行こう」っていう番組があって、あれ、[学校の生徒たちが自分の主張を]校舎の屋上で叫ぶんです。で、どっかの学校の子おが、——トランスジェンダーの子や。どう見ても、完全な女の子で、「わたし、じつは男でえーす! 男の子に囲まれて、こんなキャラになりましたあー!」って叫ぶのがあって。それを聞きながら [わたしは]「キャラじゃないだろう」みたいな、ツッコミを言ってたんですけども。

それを見て、うちの子どもが「あれ、変なお」って。「変じゃないんだよ」って [わたしが] 言ったら、「うん、知ってる。あのひと、男でも女でもないんだろ。とうちゃんも、そうやなあ」って言うから、「そうやあ」っていう話をして。ああ、この子、聞いとるんやなあ、そういうことを、って [思った]。

3.3 改名／女性ホルモンの投与

現在の下の名前「I」は、ユニセクスの響きをもつ。これは、家庭裁判所に申し立てをし、2004年3月に法的に改名したものだ。もともとの下の名前「K」は、あきらかに男性につけられる名前だった。

法的な改名を決意した経緯を、Iさんはつぎのように語る。

《Iさん》まえ、スピード違反で捕まりましてね。あれは面白かったですよ。〔運転免許証には性別欄がなく〕青切符には性別欄があるんです。むこうは、勝手にマルしよる、むこうの判断で。——わたし、もう、あのころはピチッとされた格好で、お水のお姉さんみたいな感じで、不貞腐れてたら、「すみませんねえ」って〔免許証の提示を求めるので、免許証を渡したら、そこに書いてある〕名前前で、〔警官は〕「K かよお、こいつ」みたいなかんじで、ボールペン、止まって。そのつぎに、性別欄、どっちマルしようかと思って、だいぶ悩んではったんですよ。じいっと見てたら、「男」にマルしやがって。それが腹たって、改名したんです。いちばんのきっかけは、それやったですね。つぎ捕まったら、「女」にマルさせたら、思って。

Iさんは、2004年1月から現在まで、女性ホルモンの投与も受けている。改名と女性ホルモン投与には、やはり、パートナーから強い反対を受けた。

《Iさん》わたし自身は、やっぱし、ホルモンをしたいという思いがずうっとあって。「ホルモンをしたい」っていうふうに、言いはじめるんです。

〔それにたいして〕うちのパートナーは、「それだけはやめてくれ」。「そういうの、やっぱり、耐えられない。自分が好きになった〔彼が、消えてしまう〕……」。おそらく、わたしがはじめてカミングアウトをした日を境目にして、ある日、突然、わたしはこの世から消えるんです。脱毛を〔したいと〕言う前だったと思うんですけども、その、横に座ってるわたしを見て、「あんた、いったい何者や？」っていう話をするんです。「わたしのKくんを返してくれ」っていうふうに、泣かれたことがありますね。ああ、どうしようもないですよ。もう、後戻りはできませんし、かというて、先へ進むことも、ひじょうに、やっぱり、しにくいという、中途半端なところに、自分が置かれて。

2001年の春、Iさんはいちど、「性同一性障害」の治療をしている岡山の県立病院に、足を運んでいる。

《Iさん》とりあえず、自分は何者か。そのころ、トランスジェンダーのなかでも、性同一性障害であるかどうかというのを、自分は確認したいと思ったんです。

精神科の先生に、1時間ぐらい、ずっと自分のライフヒストリーの話をして。「先生、わたしは性同一性障害なんですか？」と聞いたら、「1回の診察ではなんとも言えませんが、たぶん、そうでしょう」と言われて、ああ、自分はそうやったんやあ、って。内心、ごつつうホッとしたんです。なにしろ、ホッとした。お墨付きをもらったっていう感じかもしれない。

その数ヵ月後、この病院で、パートナーと一緒に説明を受ける機会があった。

《Iさん》パートナーは、そこで「ホルモン投与はやめてほしい」[と言った]。表向きの理由は、ホルモンを投与すると、ひじょうにからだにインパクトがありますので、「せっかく健康なからだに生まれたのに」[と]。

いつでも、パートナーは言うんです。「背が高いあなたがうらやましい。腕力があるあなたがうらやましい。そういうなものを、なんで捨てんといかんのや」って。「肝臓にも負担がかかるのでやめてほしい。それは、受け止められない」。——そこで、病院通いが止まるんです。それから2年間、ずうっと、ことあるごとに「したい」「ダメ」「したい」「ダメ」ってかたち、ずっと続くんです。

ケンカを繰り返すなか、やがてパートナーに「心境の変化」があったようだといさんは語る。

《Iさん》わたしもひじょうに勝手な人間で、女になりたい、ホルモンしたいと、いろんなこと言うてるんですけども。[でも]学校でやってることは、なんにも変わってないんです。在日の子とかかかわって、部落の子とかかかわって、交流会やって。全国の在日外国人の高校生交流会がある、そのなかで、もう、いろんな子らとかかかわって。しょっちゅう、泊り掛けで、あっちこっち行って。

なんで、[彼女が]わたし[と]結婚しようと思ったかつたら、[彼女は]

旅費の担当してはったんです、事務で。異様に、□□〔＝被差別部落〕への出張が多いんです、わたし。家庭訪問が、ダントツに多いんですよ。こいつ、何してるんやろうと思って、関心をもって見てみると、部落の子とか在日の子とか、あるいは、やんちゃな子なんかと、ずうっとかかわってる。そういうな、わたしと出会って、それに共感をして、結婚しようと思ったということなんです。で、それは、ぜんぜん変わってないんです。わたしがずっと一貫して言い続けてたのは、「外は変わるし、たとえば性別が変わったとしても、人間は変わらない。わたしはわたしのままだ」と言うんですけども。うちのパートナーは「それは違う」って言ってて。

そういうなのが、うちのパートナーのなかで、一致をしたみたいなんです。どうも、名前を変えようと、ホルモンをしようと、髭を脱毛しようと、△△〔＝わたしの名字〕はあくまで△△らしい。ぜんぜん、こいつ、変わっとらへんなあと思ったときに、もう、ええかあ、っていうふうに思ったみたいなんです。

2003 年末ごろ、「改名をしたい」「ホルモン投与したい」という I さんの希望にたいして、ふたりなりの結論を出した。

《I さん》やっぱり、相談をされるかぎりには〔彼女は〕「やっぱり、嫌だ。やめてくれ」っていう話になるんですね。とうとう、最後の最後に、彼女、言うたのは「わたしに相談するな」と。「あなたがわたしの許可を得るということは、あなた、許可を得たら、うれしくて、ホイホイやるだろう。そうは、わたしは言えない。でも、あなたがしたいんなら、その結果にたいして、あなたは自分で責任を取りなさい。そのことで、肝臓がダメになったり、離婚することになったとしても、その責任はあなたにあるんだから、あなたが責任を取りなさい。わたしに許可を取るな」って言うたんです。

そこで、まあ、それはそのとおりやなど。“あなたは偉い”と思って。じゃあ、やっぱり、自分の思うとおりやろうと決めて。離婚をしないとか、からだへのインパクトなんてことは、自分がまた、それを、自分のやり方で乗り越えていけばすむことだから。やろうって決めた。

「性同一性障害」の診断を受けた岡山の県立病院に紹介状を書いてもらい、現在は、もっと自宅に近い、関西地方にある病院でホルモン投与を受けている。

3.4 職場の同僚／管理職／生徒たちの受け止め方

Iさんは、教員になってからの約20年間、おなじ高校で勤務している。そのため、職場の同僚のうち「かなりの人間は、わたしの移行過程を知っている」という。同僚の受け止め方は、さまざまだ。

《Iさん》ひとつのパターンは、“あいつは、〇〇さん〔＝ゲイの同僚〕に影響されて、ああいうふうになったんだ” っていうふうなかたちで捉えるひとがいます。それから、いっぽうでは、あまり、そのことに関心をもたないひとが、とくに喋らないひとにいますね。

Iさんは、「トランスジェンダー」であることをあきらかにして人権（教育）をテーマにした講演や執筆活動もしている。同僚のなかには、そうした資料を読んで知っているひとも多いだろうという。

職場では、「表立っての」「正面切っての」カミングアウトはしていない。

《Iさん》やっぱり困るのは、たとえば、一緒にスキーに行きますよね。トイレ、困るんですよね。この格好で、もうすでに、男子トイレへ入るとごつつうしんどいんで、女性トイレへ入る。みんなで一緒にビール飲んで、入るタイミング、一緒なんです。そういう場合は、カミングアウトせざるをえない。——まあ、べつに、女性のトイレつつうのは個室ですから。とくに問題は起こらないですから、とくに同僚にたいして、もう、あえてカミングアウトしてないです。親しくなっていくと、「じつは……」みたいな感じで、話をすることはあります。「トランスジェンダーやねん」とか「性同一性障害やねん」っていうかたちを言うたり。……

基本的にはほとんど言うてない。正面切っては言うてない。まあ、「△△〔＝わたしの名字〕は、ああいう人間なんやな」っていう感じですね。「△△は△△」っていう感じ。

教育委員会でも、Iさんがトランスジェンダーであることは「わかっている」。このことについて、管理職とのあいだで問題が起こったことは「ない」。

《Iさん》〔管理職にも〕とくには、表立っては言わないです。〔ただ、2002年に、人権問題を扱う雑誌に「トランスジェンダーである」ことをあきらかにして寄稿をしたさいには〕校長に、「自分はこういう人間で、こんど、こういうに出るんだけど」って、いちおう、相談ていうか報告ていうか、言ったことはあります。診断書を持って行って、「性同一性障害らしいです」ということで。そうすると、〔校長も〕受け入れざるをえない。「学校名は出さないの、ご心配なく」という、そこだけは、線として置いといて。

そういうの〔＝「性同一性障害」という病名〕は、方便として使いますね。〔テレビドラマの〕「〔3年B組〕金八〔先生〕」以降、ずいぶんポピュラーになってるんで。診断書を見せたら「こんなん見してもろていいんかあ」。「どうぞ」言うて。その後、去年、校長変わったんですけども、〔新しい校長にも〕就任してすぐに話をしたら、「わかった、わかった」ということで。

生徒たちの受け止め方にも、「いくつかのパターンがある」という。

《Iさん》ある卒業生の、バイク〔の仕事を〕やってる子に、このあいだ、久しぶりに会（お）うて。バイクを頼んだんですけど、「先生、なんや最近、おんなになつたらしいやんかあ」「おう、そうやねん」っていう。生徒たちのなかでは、噂まわってますから。「おんなになつたんやなあ」という。

このあいだも、在日の〔卒業生の〕子で、うちのクラスで本名宣言した子と、ぼったり会うて。「おう、ひさしぶり」言うたら、「ああ、先生やあ。先生、おんなになつたらしいなあ」言うて、「うん、なつたらしいよお」「まあ、ええわ。先生は、どうせ、△△ちゃんは△△ちゃんやもん」て。卒業生やと、そういうような感じですかね。

おなじ部落のなかにも、ほんとに、ビールがぬくうならんぐらいの距離に、卒業生、住んでますし。3年間担任した子が住んでますよね。それとも付き合いもあるし。

《Iさん》新入生は、わたしが担当するクラスに関しては、だいたい、いちばんはじめ、絶対おんなやと思ってる。で、どうも、声聞いて、しゃべり方聞いたら、ちがうらしい。変や、変や、変や、って思うて、男かもしれんなあ、みたいな感じですよ。——で、まあ、そのうち、そういうの考えるのめんどくさ

い、まあええかあ、「△△は△△や」っていうあれですか。わたしとしゃべったことのない生徒たちにかんしていうと、もう、おんなやと思ってる子がすごく多い。ただ、いらん子がね、「あの先生は男やでえ」とか、忠告してくれる子とかいたりして。

Iさんは、放送部の顧問をしている。現在、部員は「なぜか女の子しかいない」のだが、この生徒たちには、Iさんは「はっきり」カミングアウトをし、「いろんな話をしている」。「この子らは、完璧に受け入れてくれてる」とIさんは語る。

《Iさん》お風呂がやっぱり、困るんです。トイレとかね。女性用のトイレで、歯磨きとか、合宿のとき、しますよね。そうすると、[放送部の生徒たちは]べつに、そういうの、なんでもないですね。

一回、みんなで温泉に行ったときに、そこはクアハウスみたいところで、[男性風呂か女性風呂か]自分で選択して行くというんじゃなくて、[番台から、どちらかの風呂の]ロッカーの鍵を渡されるんです。[それで、女性風呂のほうの鍵を渡された。]「おい、どうしよう？」とかって[生徒に]言ったら、「先生、それ、やっぱ、まずいんちゃう」とか言われてですね、泣く泣く、返しに行ったということあったんですけども。……

学校でね、着替える場所が、やっぱり困る。ロッカースペースはあるんですけども、そこ、ほんとに、カーテンが1枚あるだけで、誰でも開けられるんです。鍵かけられないんですね。そこで着替えるのは、もう、苦痛なんで、放送室で着替えるんです。放送室っていうのは、ふつう、調整室とスタジオってあるんですよ。スタジオのほう広いんで、ここで、子どもら、たむろしてますよね。わたし、調整室のほうで着替えてると、「先生、なんで、そっちで着替えてんのお？ こっち、おんなばかりなんやでえ」とか、言うてくれるんですよ。

「ほんとに、貸切の風呂やったら、一緒でもかまへんよねえ」とか言うてくれる。そんな関係になってる。

そのほか、在日外国人高校生交流会⁴⁾のメンバーも、「いろんな受け入れをしてく

⁴⁾ 2006年10月29日にわたしたちは、「在日外国人高校生交流会」の場に立ちあうことができた。というのは、この原稿の公表の承諾を得るために、10月27日の晩、京都市東九条の焼肉屋でわたしたちは1年半ぶりにIさんにお会いしたが、「29日

の日曜日に高校生たちが集まるから、おいでよ」と誘われたのだ。以下は、Iさんからの求めに応じて、黒坂が書いた当日のフィールドノートである。Iさんの日ごろの活動がどんなものか、その一端を知る手掛かりになると思われるので、転用する。

《おいしく楽しく学べるところ——2006.10.29 フィールドノート》

東九条文庫センターは、外壁に農楽の絵がダイナミックに描かれた、素敵な印象の建物だ。きょうは、「在日外国人高校生交流会」があるというので、わたしと埼玉大学の福岡先生は、学会の最終日をサボってこちらに来たんだ。この選択は、正解だった！ ルーツがさまざまの中高生たち10数人と、Iさんから学校の先生たちと、おいしく・楽しく・学べる時間を過ごせたから。

お昼ごはんのための餃子づくりを、いっしょにやる。「ニンニクの皮を剥きやすくする方法」（おしりの部分をカットして、水を張ったボールにぶっこんでおく）を教わった。秘伝の「焼肉のたれ」をつくる分もあって、ニンニクは10玉も（！）剥かなきゃならなかったから、とっても助かった。餃子の具に入れるニラを切るのは福岡先生で、その切り口の細かさを、高校生のTちゃんに「すごい！」と褒めてもらい、うれしそうにしていた。

皮づくりの段になると、「すごい！」と言うのはわたしたちのほうだった。Tちゃんは、麺棒を上手にを使って、きれいに円く、しかも手早く伸ばしてゆく（わたしがやると、いびつなかたちになって、ぜんぜんダメ）。中国から日本に来て9年になるけれど、日本語はまだまだ難しく感じる、と話していた。でも、彼女の会話を聞いているぶんには、とても流暢な日本語だ。きょうは、学校の友だちを連れてきていた（この友だちのルーツは日本。交流会には初めて来たそうだ。「わたしたち、ただの日本人だね～」というのが彼女との合言葉）。

手作りの皮は、実際に包んでみると、市販の皮との違いがわかる。粘りがあって、ひだをよせるときに生地が伸びる。皮どうしをくっつけて閉じるのに、水はいらない。ただし、ぎゅっと圧力をかけてきちんと閉じないと、お湯のなかで開いちゃうんだって。

お昼のメニューは、水餃子、チヂミ、そしてキムチ各種。水餃子はムッチリとしておいしい。Iさんの司会で自己紹介が始まると、見た目だけではぜんぜんわからない、中高生たちのルーツが語られる。いわゆる“新渡日”の子は、中国からが多数、台湾からが1人、インドネシアからが1人。そして、在日コリアン4世の姉弟。（Iさんは「お父さんが男でえ、お母さんが女でえ、わたしはそのダブルです」と言い、みんなの爆笑を買った。）中国がルーツだという高校生のRくんは、Iさんに「でも、ここに来るようになってから、朝鮮人もいいと思ってるでしょ？」と聞かれ、「うん、そうそうそう！ だって、食べ物うまいだもん。コチジャン、超ハマる～」と話していた。

ひとりの学校の先生がゲストで来ていた。その先生は、今年の夏休み、京都教育大学の一室を借りて、3日間、在日外国人の小学生たち30人の宿題や勉強をみる取り組みをした。この3日間で、大学にあこがれる子どもも出てきて、とてもよかった。だけど、そのまえの段階として、中学の勉強、そして高校進学というハードルがある。——Iさんがバトンタッチして、話をすす

れてる」という。

勤務校へは、スカートを着いて行くことはない。普段は「ユニセックス系の、女性」という服装でいることが多いという。トランスジェンダーであることを「そこまでアピールする必要もない」し、「無用な混乱は避けよう」とも思っている。それに、最近では、スカートは「あんまり好きじゃない」「めんどくさい」と感じている。

《Iさん》たぶん、一般的な話としては、女性としてのシルシを身にまとうことで、[自分を]女性としてまわりに認知させるという、そういう作用っていうの、どうしても必要になる場合があるんですけどね。うん。そのへんの意識が、ずいぶん、いま、希薄になってきてて。あるいは——ひとから言わすと「うぬぼれだ」と言われるかもしれないけども、いまは、どんな格好してても、だいたい女性っぽく見られることが多いので。だから、まあ、いいかあ、という。メイクはしないし、ジーンズ、っていうのが、いちばん好きな格好。その格好で、フラフラとしてますね。

3.5 地域の人たち／親たちの受け止め方

15年間住んできた被差別部落の地域でも、自分がトランスジェンダーであることについて、Iさんは「あんまり言うてない」という。「いちいち説明を始めると、一個の説明、何時間もかかるんで、会うたびに説明するの、めんどくさい」からだ。

地域の人たちの受け止め方について、Iさんはつぎのように語る。

《Iさん》わたし、髪の毛を伸ばし始めたころに、「なにを女みたいに伸ばしてるんやあ」って[ある人から]言われて。「ええやん。好みや、好みや」言うて。途中から「男のくせに」って言いかけて、まあ、フェミ〔ニズム〕のこともあ

める。「来日してきた子ら、日本語がむずかしくて、学校の宿題をやろうにも、たとえば、問題の意味そのものがわからなかったりする。みんなも、そういう経験、あるんやないかと思うけども。それでね、みんなの力を貸してほしいんやて。なあ、〇〇、インドネシアの言葉、覚えてる?」「んー、……覚えてる、と思う」「よっしゃ! そういうなあ、みんなしかできんこと、みんなの力が必要とされてるんや」。それまで冗談を飛ばしじゃれあっていた中高生たちの顔が、きゅうに真剣になった。

中高生たちはキムチを漬ける作業もしたらしい(このあと新幹線に乗るわたしたちは労働免除)。最後に記念写真を撮って、解散。みなさま、どうもごちそうさまでした。また機会があったら、遊びに行きたいなと思っています。

るんやろうけど、「お……」まで言うて、飲み込んで、「教員のくせに」って言い換えたひがおるんですよ（笑）。それを、笑っちゃって、〔それから〕言わなくなりました。そのうち、ほんと、言わなくなって、目線が変わってきたのを感じる。やわらかい目つきに変わっていった。

地域のまわりの人らも、わたしのこと、ずっと見てるわけなんですけども。けっきょくねえ、どこがベースいうたら、「先生（せんせ）は先生（せんせ）」。こんな言い方したらあれですけども、その、□□という部落のなかに、よそから移り住んできて、結婚もし、子どもも生まれ、PTA 活動をし、去年は〔PTA〕会長もやって。地域の〔解放〕子ども会の活動をやって、子どもらの面倒をみて、まあ、卒業してっった子も何人かおるわけですね。だから、たぶん「△△は△△」という目で見てるんかな、と。ちょっと、涙もろくて、最近。そういうふうには思うんですよ。

Iさんは、自分の両親や、パートナーの母親にも、自分がトランスジェンダーであることを話している。

Iさんの父親は、大学のゼミ生のなかにセクシュアル・マイノリティの学生が何人かいたこともあって、「免疫があったみたい」だという。

《Iさん》でも、“まさか自分の子どもが”とは思ったらしいんだけども、それは受け入れなくちゃいけないことなんだという、そういう土壌をもってる人。「金八」を見て勉強した、とか。あと、わたしがいくつか本を、友だちと出してるんで。そういう本を渡して。〔そしたら、父は〕読んだりはしてくれてる。

母親も、理解しようと努力をしてくれている。ただし、名前を「K」から「I」に変えるときには、「やっぱり、すごく抵抗があった」。

《Iさん》自分たちががんばってつけた名前〔だということ〕で。それは、わたしもあったんですけどね。父親、母親からつけてもらった、この名前ってことで。……

でも、まあ、わたしは名前を変えることによって、もとのKっていう名前が、言えるようになったんです。それまでは言えなかった。それしかなかったから。下の子から、「お父さんのお名前は？」って言われると、とまるんですよ。言え

ないっていうことがあった。——そのときに、いまならば、「いまの名前はIだよ。昔の名前はKっていったんだ」。「なんで？」って言うたら、「こうだよ」って説明ができる。そういった意味で、Kっていう名前にたいする拒否感は、すごく減ったんですよ。そのことを〔両親に〕話をして、はじめて「ああ、よかったんだね」ってことで、いまは、ふたりともわたしのことを「I」と呼ぶように努力をしてくれています。

《Iさん》パートナーのお母さんも、いま、わたしのことを「I」というふうに呼んでくれている。ここは、母子家庭なんですけども。

はじめは、びっくりしたでしょうね。でも、まあ、わたし自身はなにも変わってないんで。だから、そのショックは、だんだんやわらいでいってる。本を出してるっていうの、〔読んでもらえるので〕ひじょうにおつきいですね。

3.6 課題——「性別二元制」をほぐす／居場所づくり

Iさんは、2003年7月に成立した「性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律」には、「一貫して反対っていう立場を、ずうっと取り続けて」いる。というのも、それは「戸籍制度を強化」し、「性別二元制を強化する」ものだと考えるからだ。

《Iさん》けっきょく、社会はなにも変わらないわけですね。ようは、こちら〔＝男〕からこちら〔＝女〕への移動、こちら〔＝女〕からこちら〔＝男〕への移動、両極端の移動っていうのは、可能になりつつあるんだけども。じつは、その境界にいる人間というのが、そっから排除されてく。

わたし、いま、いちばん恐れているのは、特例法が成立したことで、ようは、社会の側としては「完全に女になったらええやん。完全に男になったらええやん。戸籍も変えたらええやん。それでいけるんだろ」っていうふうになったときに、「ちがう」っていう〔つまり、完全な女でもなく、完全な男でもないというかたちで生きていきたい〕人間は、生きづらくなってくる。「あなたがそれを選択してるんだから、あなたの自己責任でしょ。それにかんする不利っていうのは、あなたが背負わなきゃしょうがないやん」「制度は整ってるんだから」ってやられると、おそらく、とつても生きにくい社会ができてくるんじゃないかと思うんです。

そういった意味で、まあ、性別二元制ってやつ、あれをどういうふうにはぐ

してくかっているのが、とても大切な問題じゃないかと。どっからどう手をつけてええかわからないんですけども。それをやらへんかったら、ちょっとしんどいかなあって気がしています。

もちろん、性同一性障害者特例法の適用を受けようとする人たちの、「ふつうに男として、あるいは、ふつうに女として暮らしていきたい」という願いそのものは、尊重すべきだと考えている。

《Iさん》そういうな生き方をしたい人は、とうぜん、してもらったらい。というか、するのはとうぜんだから。そういう人の生き方を保障するっていう意味では、評価をしてるんです。でも特例法そのものは反対、っていうふうに考えてます。

もうひとつ、トランスジェンダー当事者、とりわけ若い人たちの「居場所づくり」をすすめることが大事だと考えている。

《Iさん》個人的にはね、わたしを支えてくれてる人は、当事者の友だちもいるけど、当事者外の人たちが、すごく多いんです。その人たちが、わたしを受け入れて、ごく日常のつまらない〔とりとめのない〕会話をしてくれる。そういう人間ばっかりなんで、もう、わたしにとっての自助グループは、いらないんです。でも、それを必要としてる人が、やっぱりいる。その人たちの場所っていうものを、作らんといかんかな。

とくに、中学生、高校生の子らが、自分たちの思いのたけを述べ合えるような場所をつくりたいなあって思うところ、ありますね。在日の高校生交流会で培ってきたノウハウなんかを使いながら、独自の交流会を立ち上げていかんといかんかなあ、というふうには思ってます。

Living a Transgender Life: A Life Story of an MtF in Her 40's

Yasunori FUKUOKA and Ai KUROSAKA

This is a life story of an MtF (male to female) transgender in *her* 40's. This life story can be divided into three periods: (1) a period of confusion about “not knowing who I am” and of self denial, (2) a period of finding “the words to express my existence” and of coming out, and (3) a period of discord with people around *her* while living “trans,” and of overcoming this discord.

The narrator had a desire to “wear women’s clothes and have a woman’s body” since childhood. At the same time, *he* was aware that many other boys do not have these desires and that those who do are looked down upon. Necessarily, the narrator hid *his* own desires from others. When *he* was alone, *he* unleashed *his* desires by wearing *his* mother’s clothing and such, but *he* also felt a sense of guilt. As *he* grew up, *he* experienced “confusion” as *he* began to clearly see the gap between the person others wanted *him* to be and the person *he* wanted to be. *He* did not think *his* problem was a human rights issue.

In *her* mid-30's, after marriage to a female partner and the birth of their children, *she* encountered the terms “transvestite” and “transgender” and realized “I’m not a rare case.” *She* came out to *her* close colleagues and partner.

Although the process of doing “trans” (changing clothing, changing *her* name, taking female hormones) caused discord in *her* workplace, family, and local community, it helped *her* develop the strength to overcome it. *Her* aims are to create a space where transgenders can feel at home and to destabilize the idea of “binary gender system” in Japanese society.

Keywords: transgender, coming out, life story